



アナキズムとテロリズム



江 口 幹

先日私は、ジャーナリストである若い友人の訪問を受け、以下のような問答をした。

客 どうです？

私 どうですって、何が？

客 例の一連の企業爆破事件で、いろいろと身辺が騒がしかったんじゃないですか？

私 というほどでもないけどね、まあうるさかったことは事実だ。だけど、何だい？ そんなことを聞きに来たわけでもあるまいが。

客 いや、実は、例の事件、あれをどう思っているのか、ごくばらんに話してもらいたいと思って。

私 いうことはないな。

客 なぜです？ 何かと考えさせられた点はある、と思うんですかね。

私 例の事件について、僕は警察情報以外の何も持っていないからさ。実際に何が起きたのか、はっきりわかっていないから

ね。いうことはないな。

客 だって、新聞や週刊誌であれだけ書いていたじゃないですか、いろんな事実を？

私 警察発表をうのみにした事実をだろう？ たとえば新聞は、アナキストグループの仕業だ、と書いた。警察がそう発表したからで、マスコミはそれについて何の根拠も持っていなかったし、アナキストとは何か、を知っていたわけでもなかった。しかし、アナキストグループだ、と書き、なぜアナキストグループなのか、といった注釈めいたものも書いた。それは、マスコミがいかに無責任に、定見もなしに、言葉についての潔癖さもなく、いい加減な情報を流しているかを、はっきりと教えてくれる性質のものであった。そういうおおよそ信頼できないものによって提供される情報、そんなものをもとにして何かいうなんてことはできないな。あの事件について何かいうとすれば、自分で調べてみなくてはならない。しかし僕には、それだけの関心はあの事件にないし、今のところ、それだけの時間のゆとりもない。

客 なるほど。しかし、それじゃ、少なくともあの事件を報道

したマスコミに対しては何かいうことがあるんじゃないですか。

私 事実と確認し得たことだけを書く、わかりもしないことをわかった風には書かない、自分の責任ある見解だけを書く、少なくとも他人の見解の場合はそれが誰のものか明記しておく、というのは言論人としての最低の条件だろうね。こんどの事件では、その最低の条件すら、いかに守られていないかが暴露されたし、日本のマスコミがいかに粗末で、いかに権力に迎合しやすい体質を持っているかはつきりした。何ともお寒い限りだが、結果として、意識的にか無意識的にか、アナキズムないしアナキストに対し、実に不当な、的はずれのキャンペーンをしたわけだ。

客 実際、かなりひどいものだったと思いますが、あれに対して怒りを感じませんか？

私 もちろんね。しかし、アナキストの側にも自省すべき点がないわけじゃない、とも思うな。

客 どういうことです、それは？

私 例の事件に関連して、何とも珍妙な、滑稽きわまる、とんでもない無知をさらけだしたアナキズム解釈が横行したわけだけれども、しかしそれは、一面からいえば現代に有効な思想や実践を、アナキズム運動が提示し得ていないから、半知半解のアナキズム観を許した、ともいえるんだ。今、アナキズムとはこういうものだ、という思想なり運動なりが蔽として日本にあれば、いくら何でもあんなていらくを見せたいはいらなかった、と思う。

客 そういえばそうですね。

私 六〇年代の半ば以降、アナキズムへの関心が強くなっていることは確かだ。それは出版物の増加という点でもはっきり指摘

できるけれども、しかし、その大半は翻訳ものだし、日本のものは過去を振り返ったものが多い。現在の日本をどうするか、という形での、現に生きている日本人の思想としては、アナキズムはほとんど形成されていないといっている。そんな風にアナキズム自体が曖昧であれば、滑稽きわまる解釈を許す余地を作っているのはアナキストたち自身じゃないか、といわれても仕方のない面もあるな。

客 現実には有効なアナキズムが求められている、というわけですね。

私 もちろんそうだけれども、そんなものがそう簡単に出てくるわけではない。いろんな積み重ねの上に生まれるものだからね。だから、こんどの事件のマスコミのアナキズムについての不当な扱い、これは十分糾弾しなければならぬが、しかし半面、ここ何十年かのアナキズム運動の非力を反映していた、という風にも受け取って、自省してみる必要があると思う。

実は、アナキストというときとまづ関連づけて使われる、直接行動という言葉、マスコミが正当に理解して用いてはいないので、念のために辞書をひいてみたんだ。すると、広辞苑には、「規範・制度を無視して、自己の意思を直ちに達成する行動をなすこと。暴力行為」とあり、日本国語大辞典には、これは僕の好きな辞書なんだけれどね、広辞苑の方を少し書き直しただけらしくて、「自分の意思を達成するために、社会の規範や制度などを無視して行動すること」とあるんだな。これを見て、僕はさすがに呆れたね。それじゃ直接行動の真意は示されていないし、単に暴力行為をさすというのでは曲解も甚しいわけだが、こういう辞書が権威ある

ものとして平然と存在してきたし、しているという事実には、僕はやはりここ何十年かのアナキズム運動の非力さを感じざるを得ない。いうまでもないことだけれど、直接行動というのは、労働運動の中で議会主義に対立するものとして使われた言葉だ。つまり、労働者の解放を、議会や議員にお願いするのではなく、自分たち自身で直接に運動して達成しよう、というもので、もっと普遍的にいえば、直接行動とは、民衆が自分らの要求を、自発的に、自分らの行動を通して達成しようとする行為ということになる。今の日本でいうと、公害反対の市民運動などがその端的な例ということになるが、しかし、そういう真意を長年にわたって伝えさせずにいたほど、思想としても運動としてもアナキズムは無力だったわけだ。したがって、こんどの事件のマスコミの反アナキズムキャンペーンについては、当然抗議すべきだけれども、単に抗議するだけではなく、アナキズム運動を無力さから脱却させる方向への努力、それも払うべきだ、と感ずる。

客 こんどのマスコミ報道でもそうですが、一般には、アナキズム即テロリズムと受け取られているようですが。

私 らしいね。それが不当なことはいうまでもない。しかし、これについても僕は、アナキスト自身にも責任があるのじゃないか、という気がする。アナキズム即テロリズムだといわれれば、大半のアナキストは曲解だといって腹を立てるだろう。しかし、そういう反面、テロリズムに対して正面切って反対しにくい空気、反対すると権力に対して叛逆的でないと見られるんじゃないか、といった空気、何となく暴力を礼讃する気分、といったものが、少なくとも一部のアナキストたちの間にあるのは事実じゃないだ

ろうか。そうだとすると、しかもそれが十分に批判されていないというのなら、アナキズム即テロリズムといわれるのに、アナキストが手を貸している面もあるわけだ。ともかく、気分的に何となくというんでなく、テロリズムに賛成なら賛成、反対なら反対だ、と明確に主張すべきだね。

客 テロリズムには反対ですか？

私 反対だね。特に今の日本ではナンセンスだ。僕は、現に僕らが生きている社会で人間の解放はどうしたら行われるのか、ということにもつばら関心があって、アナキズム思想史や運動史の研究なんて、全く何一つしてこなかった人間なんだけれども、現実に有効なアナキズムを確立する作業として、過去のアナキズムの中の、有効なものと陳腐化したものとはつきり腑分けをする必要がある、と近ごろ感じている。そういう意味で、各思想家別、あるいは運動史上の諸問題別に、批判的再検討を加えねばなるまい、と思っているんだけど、そういうテーマの一つがテロリズムだね。アナキズム運動がテロリズムの一時期を持ったことは紛れもない事実だし、その時期を通過して、アナキスト即テロリストというイメージが定着したわけだけれど、しみというのは、つけるのは簡単だが、落とすのは容易じゃない。嘘を吐いたり盗みをしたりして信用を失った人間が、信用を取り戻すのが容易ではないようにね。アナキズム運動は、それだけ厄介な負債をかかえているわけで、それを清算したいのなら、テロリズムに対して曖昧な立場をとらず、テロリズムとは無縁の社会変革の方途を明示し実践しなければならぬと思う。

客 なぜテロリズムに反対なんですか？

私 テロリズムというのいろいろあって、本来テロリズムとは、恐怖手段を基礎にした政治体制、つまり秘密警察とかギロチンとかに立脚する政治体制をさすわけで、人間の解放を目指すものが、そうした恐怖政治に反対するのは当然のことだ。しかし、いま問題にしているのは、革命的なグループないし個人が、政治目的のために行う組織的な、ないし個人的なテロリズムで、それに僕が反対なのは、それが他人に対する威嚇手段による意思の強要だからだね。というのも、僕は自由な発意と合意による社会を求めているからで、そういう社会の誕生は、それを達成しようとする運動の中でも、自由な発意と合意とを確立して始めて可能になる、と信じているからだ。ただ、だからといって、いかなる意思の強要にも反対だ、という風にすっぱりと割り切ってはいえない。なぜかといえば、僕は抑圧という他人の意思の強要下にあるわけで、それをねのける、抵抗としての、反撃としての強要を行わざるを得ないからね。しかし、抵抗としてだから、何をしてもいい、とは思わない。特に、人身に危害を加えることは許されないと思う。

客 なぜです？

私 なぜ僕が抑圧に反対し、それを排除しようとするか。それは、抑圧の下で、もっと豊かであるべき人間の生命の発現が妨げられているからで、人間の生命への愛、生活への愛があればこそ抑圧に反対する。つまり、抑圧に反対するのは人間の生命を限りなく尊重したいからだ。そういう人間が、もし他人を殺してもいいと考えるとすればおかしいじゃないか。僕は、誰も僕に何かを強要したり、僕の生活を侵害したりする権利はないし、まして生

命を奪う権利はないと思っっているけれども、同様に、僕にも、他人に対してそういうことをする権利があるとは思わない。仮に、抑圧者だから、敵だから殺してもいいということを認めたらどうなるだろう。誰が、どんな風にして、抑圧者であり、敵であるか認定するのか。それが勝手に行われるとするなら、抑圧者だ、敵だ、というレッテルの下に、自分の気に入らないもの一切を抹殺することが始まるに違いない。それは、秘密警察、強制収容所、粛清、戦軍軍団による侵略、につながる道じゃないのか。――要するに僕は、テロリズムには原則として反対だね。

客 原則としてというと、例外はある、というんですか？

私 ないではない、と思う。個人的なテロ活動ないし少数者の武装ゲリラによる以外に局面の打開がはかれない、という状況はないでもないと思う。たとえば、独立以前の旧植民地を思い浮べてほしいけれど、圧制が歴然として存在している、それに対する大衆の怨嗟の声は国中に満ちている、しかし、産業も民主主義も未発達であり、大衆の組織的な活動ができる状態にはない。そういう時、テロないしゲリラ活動が民衆の声を代弁する、あるいは民衆の決起をうながす導火線になり得る、ということはあると思う。しかし、その場合でも僕は、諸手をあげて賛成するか、といわれると、しかねるね。そのテロないしゲリラ集団が、抑圧者に向けていた恐怖手段を、こんどは民衆に向けてないという保証はないからで、事実、大衆は、自分たちの組織的活動により自治的に抑圧を排除しない限り、自分らの完全な解放を手に入れることはできない。少数者の威嚇手段を行使しての抑圧の排除は、うまくいって、前のよりは大分ましな抑圧に代る、ということではかな

いと思う。だから、例外として認め得るテロないしゲリラ活動というものはあるだろうが、しかしそれも、熱烈な拍手喝采をおくり得るものでは決してない。

客 そういえば、それに関連したようなことを、ロシヤ革命の時のウクライナのアナキスト・ゲリラ、マフノー軍が何かいっていましたね。

私 ええ。農民へのアッピールでね、こういつている。「一般の平等についてのアナキストの理想は、それがどのようなものだろうと、たとえそれがアナキストのみによって形成されているとしても、軍隊の努力を通じて達成されることはあり得ない。革命軍は最善の場合に、嫌悪すべき旧制度の破壊に役立ち得る。建設的な仕事、建設と創造のためには、論理的に力と命令にしかとつき得ない、どのような軍隊も、完全に無力であり、不吉ですらあらう。……アナキストの軍隊も、孤立した英雄も、グループも、アナキストの連盟も、労働者と農民のための自由な生活を創りだせない。ただ、労働者自身のみが、自覚した努力によって、国家も旦那方もない、彼らの安楽を建設し得るであらう」。僕は、このアッピールには諸手をあげて賛成する。

客 そんなウクライナのゲリラに比べて、過去のアナキストのテロはどうですか？

私 さっきもいったように、僕は運動史には暗い人間で、責任を持った発言をするにはもっと史実をよく調べなければならぬと思うけれど、ごく大ざっぱにいて、アナキストがやったテロはあまり同情できる性質のものじゃない、と思う。アナキストのテロというと、特にフランスでの一八八〇〜九〇年代が有名だし、

それがアナキズム即テロリズムというイメージを作りあげさせたと思うんだが、政治的に見て、例外的に認め得るものの域にも達していないと思う。道であった最初のブルジョアを刺すとか、国会の議場を爆破する、カフェに爆弾を投げる、あるいは、同志の復讐のために大統領を刺す、とかいった事件がつづいているわけだが、単なる気晴しとしてならともかく、政治活動としては幼稚だとかいいようがないな。はっきりしていることは、被抑圧者の解放をどんな風にして達成するか、という展望を持っていなかったこと、持っていたとしても叛逆することが既成秩序の打倒につながるといった他愛ないものだったこと、したがって自分の行為の政治的な意味を全くつかんでいなかったことだね。逆にいえば、解放に達するための明確な展望を持つ力がなかったから、そんなことをしたわけだ。その結果、一連のアナキストのテロを一番喜んだものは誰だったか。権力側だね。事実、警察は挑発もしたし、時には警察自身でしかけた爆弾を、アナキストの仕業と宣伝したこともあるようだ。そうして、アナキストは恐ろしいものだというイメージをふりまき、権力への批判の芽を封じ、アナキストを徹底的に弾圧するきっかけにした。残念ながら、それ以後のアナキストは、そういった歴史の教訓を十分に汲みとっているとは思われないな。

客 現在、どんな風にして解放を達成するかという展望と、テロリズムとの関係はどうなりますか？

私 テロリズムの人の余地は全くないというのが僕の意見だね。現代の社会変革、特にいわゆる先進諸国での変革を考える場合、二つの条件に注目したいと思う。一つは、既存の機構が非常に強

力でもあり複雑化していること、したがって一挙に打倒するといふことができなくなっていること、もう一つは、大衆自身にいろいろな力がついてきつつあるので、大衆自身による自治的な変革の可能性が見えてきたこと、この二つの条件は重視すべきだと思う。その点で、アナキストのテロルが横行した、約一世紀前のヨーロッパ、しかもそのどちらかといえば産業化の遅れた国々とはおよそ違っている。当時は、陰謀とか暴動とかによる革命を夢みる気分が濃厚だった。それがテロ続出の一因にもなったわけだけれど、そんな気分があり得た、ということは、今に比べたら、資本主義も国家もまだまだ単純な時代で、暴動による転覆も可能と思われるほどだったからだ。もっとも、そのころにしてもそれは幻想にすぎず、やがてサンジカリズム、あるいは議会を通じて、という別の変革の道が探ぐられるようになるのだけれども、ともかくその幻想が全く荒唐無稽とは思えない程度に管理体制は素朴だったわけで、それだけに、一度その体制を打倒したら比較的にやすく民衆自身による社会管理も可能だ、という夢想が生まれ得たのだと思う。それに加えて、大衆は、意識の上でも、自分たちを組織する力においても、ひどく未熟な状態にあったし、大衆による組織的な活動はあまり期待できなかった。そういう条件の下では、革命家独自の活動——啓蒙、宣伝、煽動、大衆組織化、あるいは武装行動——の領域はあったし、その活動が人間の解放への一応の役割を果たしたことは事実だと思う。しかし、革命家独自の活動の領域がある間、つまり、大衆が自治的に行動できないでいる間は、大衆自身の完全な解放はあり得ない、というののもまた確かだ、だから、一世紀前には革命家たちがいくら頑張っても、

彼らがなし得たことには限界があった筈だ。しかし、今日では条件が変わってきている。大衆が自治的に行動する力をすでに持った、とはいわないけれども、その可能性が見えてきた、と思う。たとえば、市民運動なり労働運動なりが、単なる日常的な利益擁護の要求貫徹のためだけではなく、自分たちで地域なり企業を、ひいては社会も管理してゆく、そういう可能性、少なくとも、そういう方向に運動を推進する可能性はでてきていると思う。こういう時代には、革命家——革命を切望しそのために努力しようとしている人間がすることは、何か独自の役割を果そうとするのではなく、大衆の自治的な活動を助長することに限られるべきだし、そうすることが、権力者を残さずに解放を達成する道、つまり大衆自身が自治的な形で社会変革を達成する道につながるに違いない。そして、この展望の中には、テロリズムは入ってこないし、入ってはならない。僕は今、アナキズムを何よりも、特定の人間の指導・統制下に国家権力を背景として社会主義化を進める、政党的の——革命家主導型の——社会主義とは違った、大衆組織によって自治的に社会主義化をはかる、そういう性格の社会主義としてとらえたいし、テロリズムの問題もそういう視点から見たいと思っているんだ。それと、現代社会の抑圧は、誰か特定の人間たちによるというより、機構による性格が強い。したがって、特定の人間を除去すれば抑圧の打破ができる、というわけではないので、その面からもテロリズムは意味を持たないね。

客 なるほど。

私 それからもう一つ。こんどの一連の企業爆破事件に関連して、大沢正道が、爆弾で物事のかたづけようとするのはテクノク

ラートの思考と同じだ、といった意味のことをいっていただけれど、これはもっと注目されていい、的確な指摘だと思うな。

客 どういう意味です、それ？

私 僕は、現代の社会変革は、現代文明のあり方そのものを根底的に問題にしない限り達成できない、という風に考えているものだけれど、それは現代文明のあり方が人間を圧殺する方向に向かっていくからなんだ。僕の考えでは、現代という時代の一つの特徴は科学技術の発達で、それによって人間の自然に対する影響力が非常に増大したこと、そして、精神的にも肉体的にも人間の力を省略することが進歩だ、という理念を生んだことだと考えている。かなりのことを科学技術がやるようになったし、それによって人間は楽になった。そこから人間に関するいろいろな問題は技術が解決してくれる、という技術信仰も生まれた。大てい問題は、人間が主体的な努力をしないでも、技術的に処理できる、という信仰というか考え方だね。これが、僕はテクノクラートの思考といっているものだと思うんだが、その本質は、人間をほかのものと同様に処理するもの、管理するものとしてとらえている点、統計上の数としてしか見ていない点で、人間一人一人を主体性のある血の通った存在だ、とは見ないんだね。この思考は、大沢のいうように、爆弾で何かが解決できるという思考と確かに共通しているように思う。しかし、僕らが現在、人間解放のために対峙しているのが、ほかならぬそうした、人間を物としてしか扱われないようになった思考の型であり、それが生みだした社会組織であり、文明なんだ。僕は、新しい社会は、人間一人一人の、自他ともに変革してゆく、主体的な努力の過程から生まれてくる

ものだと考えているし、そういう努力を省略して、自動販売機にコインを入れれば商品がすぐにでてくる、といった工合に、一挙に新しい社会に到達する道はない、と考えている。

客 なるほど。大体わかりました。どうも今日はいらうと。

私 いや、もっと十分に論証すべきことを、ほんの感想という程度で申し訳ないんだが。まあ、検討を加えるための一応のヒントをだしたところだね。

△次号予告▽

『アナキズム』九号

十二月上旬刊行

——特集Ⅱ暴力VS非暴力——

非暴力論——戦争抵抗者インターナショナル(WRI)

「内ゲバの論理」を越える

暴力批判論

武装闘争

——連載——

ある朝鮮人アナキストの伝記——金宗鎮伝(最終回)

クロンシュタット・イズヴェスチャ(五)

その他

『アナキズム』の定期購読を！

年間購読料(四号分・送料含)

一五〇〇円